HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の補助動詞「‐てしまう」の文法化 : 主観化、間主観化を中心に
Author(s)	一色, 舞子
Citation	日本研究, 15, 201-221
Issue Date	2011
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45277
Type	article
File Information	15thIlbonyongu_Ms.Isshiki.PDF

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本語の補助動詞「-てしまう」の文法化

― 主観化、間主観化を中心に ―

一色 舞子*
misshiki84@gmail.com

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 本論
2.1.「-てしまう」のアスペクト的意味
2.2.「-てしまう」の主観的意味
2.3.「-てしまう」の間主観的意味
2.4.「-てしまう」の音韻縮約形「-ちゃう」
Ⅲ. おわりに 218

Abstract

本稿は、文法化の観点から日本語の補助動詞「-てしまう」の意味変化に伴う主観化、間主観化の様相を明らかにすることを目的としている。

まずは従来の研究において一様に指摘されてきた「-てしまう」のアスペクト的意味について考察するが、本稿では多くが指摘する「-てしまう」の<完了>のようなアスペクト的意味は本質的なものではなく、それが頻繁に置かれる文脈がもたらす二次的な解釈に過ぎないと主張する。

次に「-てしまう」の主観的意味について考察する。本稿ではその主観的意味として<一掃><遺憾>を挙げる。これらは「-てしまう」に固定的な意味というよりは、発話状況を含めた文脈によってその都度実現する語用論的意味である。ただし、これらの主観的意味は排他的なものではなく、文脈によっては一形式に複数の意味解釈が可能となる場合もある。

その次に間主観的意味について考察する。本稿では「-てしまう」の間主観的意味として<言い訳><照れ隠し><配慮>を挙げる。これらは「-てしまう」のもつ「非意図化」という機能が関連していると思われる。

最後に、「-てしまう」の音韻縮約形である「-ちゃう」の意味的及び形態的特徴を考察する。本稿では、「-ちゃう」は「-てしまう」とは意味面では大きな差はないものの、運用面で異なる特徴を見せるということと、音韻縮約によって一形態素化した「-ちゃう」は「-てしまう」の文法化における形態的な証拠であることを主張する。

＊ 北海道大学大学院文学研究科博士課程一年 言語文学専攻 日本語科学専修

Key Words : 文法化、主観化、間主観化、補助動詞
(grammaticalization, subjectification, intersubjectification, auxiliary verb)

Ⅰ. はじめに

本稿は日本語の補助動詞「-てしまう」を文法化の観点から考察し、その際生じる意味変化に伴う「-てしまう」の主観化、間主観化について考察する。

「文法化(grammaticalization)」とは、簡潔にいうと内容語から機能語への変化であり、統語的自立性の喪失や意味の抽象化を伴う現象である。「-てしまう」も本動詞では持ち得た統語的自立性を喪失し、またその意味も幾分か抽象化していることから、文法化を経て生じた形式であるといえる。したがって、本稿では「-てしまう」を文法化という観点から眺めることによってその意味変化の様相を明らかにする。

Ⅱ. 本論

2.1.「-てしまう」のアスペクト的意味

従来の研究において決まって指摘されてきたのは、「-てしまう」のアスペクト的意味である。

金田一(1976)は“「-てしまう」という形には、「終結態」と「既現態」の二つの態があり、「終結態」は継続動詞に現れ、「既現態」は瞬間動詞に現れる”という。「-てしまう」の終結態は「ある動作・作用が完全に行われる」つまり、「完了する」という意味を持ち、既現態は「その動作・作用が実現する」ということを表すという。その他、「-てしまう」のアスペクト的意味のうち、ある動作が最後まで行われること、つまり<完了>という側面のみを挙げるものもある(吉川(1971)、杉本(1991))。

一方、以上のようにアスペクト的意味を本質的なものとみるものに対して、それとは異なるものを「−てしまう」の本質とみるものもある。藤井(1992)は「−てしまう」は感情・評価的意味の方がより一般的であって、限界達成はむしろ部分的、あるいは付随的であるという。大場(1999)は「−てしまう」は動作・作用の過程の、客観的に指摘できるある部分を表す形式なのではなく、「決着がつく」という述べ方であるため、その解釈は相当に文脈に依存しており、それゆえアスペクトを表すように見えたり、話し手の情意を表すように見えたりするという。

藤井(1992)がいうように、確かに現代日本語において「−てしまう」のアスペクト的用法は典型的であるとは言い難い。筆者が調べた限りでは、どの「−てしまう」も何らかの主観的意味が付きまとっている場合が多いようである。ただ、複数の出来事の継起的発生を表す複文あるいは重文に用いられた場合、一切の主観的意味を排除したアスペクト性が現れやすくなる。

(1) a.太郎がカードを配ってしまうと、皆はそれを一斉に手に取った。
b.太郎がカードを配ると、皆はそれを一斉に手に取った。

(1a)の場合、「配ってしまう」は「配る」という動作が最後まで行われたこと、つまり「配る」という動作の<完了>を表している。つまり、太郎がカードを配り終わった後に、皆が一斉に配られたカードを手に取ったということである。これは、(1b)の場合と比較することによってより明確になる。(1b)の「配る」の場合は、必ずしも「配る」という動作が最後まで行われたことを表しているとは限らない。つまり、太郎がカードを配りはじめた瞬間か、あるいは配っている途中に皆がカードを一斉に手に取ったと解釈することも可能である。その他の用例も見られたい。

(2) これはしぼるのでなく、揮発性物質である「ヘキサン」(ベンジンみたいなもの)で脂肪分を溶かしてしまい、次に六〇℃くらいに温めて、ヘキサンだけを蒸発させます。
魚柄仁之助『うおつか流清貧の食卓』

(3) …傭兵はフェランテとヴィテルリが馬に乗ってしまうまで、気をつけの姿勢で凍りついていた。

ロイス・マクマスター・ビジョルド『スピリット・リング』

(2)の「溶かしてしまう」の場合は、脂肪分が完全に溶けるまで「溶かす」こと、つまりこれ以上溶かさなくてもいい段階まで溶かすことを表しており、溶かすことが最後まで完全に行われることを表している。(3)の「乗ってしまう」の場合は、「乗る」という動作が最後まで行われるというよりは、馬に乗るための一連の動作(足を鐙にかける、馬の背にまたがる、など)を「乗る」と捉えており、その一連の動作が最後まで行われるということを表している。

以上、「-てしまう」のアスペクト的意味について検討してきた。ここでは主に「-てしまう」の<完了>というアスペクト的意味について検討してきたが、それは、複数の出来事の継起的発生を表す場合という、ごく限られた文脈においてのみ現れるものであり、典型的には用いられていないということが明らかとなった。従来の研究において指摘されている「-てしまう」のアスペクト的意味が本質的なものかそれとも付随的なものなのかという問題はあるが、「-てしまう」がアスペクトに何らかの形で関与しているということは確かである。

また、金田一(1976)等で指摘されている「-てしまう」の既現態についても検討せねばならない。「-てしまう」の既現態は「その動作・作用が実現する」ことを表しているので、「する」の一種であるという指摘もある。現代日本語において「-てしまう」のアスペクト的意味を観察した場合、このような既現態と解釈できるものが大部分であると思われる。金田一(1976)は、既現態は瞬間動詞に現れるといっているが、継続動詞にも現れ得る。次の例を見られたい。

(4) a.(まさに書いているところを見て)

「子供たちが茶の間の壁に落書きを<u>書いてしまったよ</u>」

cf.「子供たちが茶の間の壁に落書き<u>書いちゃったよ</u>」

b.(書いた後の状態を見て)

「子供たちが茶の間の壁に落書きを<u>書いてしまったよ</u>」

cf.「子供たちが茶の間の壁に落書き<u>書いちゃったよ</u>」

(4ab)は両者とも同じ発話をしているが、(4a)の「–てしまう」が「その動作・作用が実現する」という既現態であるのに対し、(4b)の場合は「ある動作・作用が完全に行われる」という終結態である。つまり、「書く」のような継続動詞の場合でも、周りの状況を含めた文脈によって既現態とも終結態とも解釈されるのである。

以上、「–てしまう」におけるアスペクト的意味を、金田一(1976)のいう終結態及び既現態という観点から検討してきた。動作・作用の<完了>としての終結態は継続動詞であるという前接動詞の性質によるものというよりは、複数の出来事の継起的発生を表す複文あるいは重文という限られた文脈において現れやすいということ、また動作・作用の<実現>としての既現態も瞬間動詞であるという前接動詞の性質のほか、発話状況も含めた文脈によっても解釈され得るということも明らかとなった。

前述の通り、「–てしまう」には何らかの形でアスペクト性が関与しているといえるが、以上のようなアスペクト的意味が本質的なものなのか、それともあくまで付随的なものなのかは更なる検討を要する。

では、次に「–てしまう」における感情・評価的意味、つまり本稿でいう主観的意味について検討する。

2.2.「–てしまう」の主観的意味

本稿では「–てしまう」の主観的意味として<一掃><遺憾>を挙げる。<一掃>は「動作主体が意志を持って行為を行って負担感などを一掃し、その結果、話し手が爽快感を感じること」を表し、<遺憾>は「動作主体が意志を持って行為を行い、あるいはコントロール不可能な状況下で行為を行い、その結果話し手が残念な気持ちになること」を表すが、これらは両形式に固定的な意味というよりは、発話状況を含めた文脈によってその都度実現する語用論的意味である。

文法化において意味が変化する際、事象や状況の現実世界としての特徴に関わる意味から、話し手の信念や態度を表す主観的な意味へと変化することを「主観化(subjectification)」というが、「–てしまう」の主観的意味はこのような主観化の

結果、帯びた性質であると考えられる。

例えば、(5)のようにいうとき、(6)のように「あまりにも汚いので」という文脈が加われば<一掃>の意味に傾き、また、(7)のように疑問文にすると、今度は<遺憾>の意味に傾く。

(5) ベッドを片づけてしまいました。

(6) あまりにも汚いので、ベッドを片づけてしまいました。

(7) ベッド(を)片づけてしまったの？

以下、「-てしまう」における主観的意味<一掃><遺憾>を、それぞれを取り巻く文脈と語形に注目し、さらに詳しく見ていく。まずは<一掃>の意味を表すものから見ていく。

(8) くよくよせずに楽しいことをやったほうがいいのかもしれない。壊れた恋は早く捨ててしまおう。

青山えりか『好きから始まる冬物語』

(9) 食べ過ぎてしまいそうならいっそのこと、そのまますぐ寝てしまいましょう！

Yahoo!知恵袋

(10) 私自身、子供の時分から「早く片づけなさい」「さっさと片づけてしまいなさい」と母親にいわれ通しで育ったような気がする。

森本哲郎『日本語表と裏』

(11) このまま何も考えずに眠ってしまいたい。極限状態に長い間さらされていた反動か、今はひたすら眠たかった。

恩田陸『不安な童話』

(12) いっそ流されてしまったほうが、彼女も僕も楽になれるのかもしれなかった。

村山由佳『きみのためにできること』

(13) わたくしが子を産みますたびに、蓮如さまはそれは大変なよろこびようで、苦労など吹っとんでしまいます。

五木寛之『蓮如』

これらの用例を観察してみると、意志形(意志(8)、勧誘(9))や、命令形(10)、「−たい」のような願望の補助形容詞(11)と共起する場合が多いようである。これは、自身が意志を持って行う行為や、命令をして他人にある行為を促すこと、また何かが実現することを願うことには、一般的に話し手にとってプラスの方向へと状態を転換させるという含意があるためであると考えられる。藤井(1992)にも命令形で現れる場合に関して、以下のような指摘がある。

> 命令の形でも「してしまう」はつかわれる。この場合、「してしまう」でさしだされるのは、話し手が期待する、あるいは好ましく思うところの聞き手の動作や変化なのだが、命令する以前には、話し手にとって不都合な出来事が前提としてあるのが普通である。話し手は、その不都合な出来事を回避、解決するため、自分にとって都合のいい聞き手の動作や変化をうながしているのである。[1)]

話し手にとって都合のいい状態への転換をうながす心理というものは、命令に限らず、自身の意志や願望にも共通して存在している。このような理由で、「−てしまう」の<一掃>の主観的意味は、意志形や命令形、願望の「−たい」と共起した場合に現れやすいのである。

では、次に<遺憾>の意味を表す「−てしまう」の用例を見ていく。

(14) …自分ならではの将来予想(ストーリー)に基づいて投資を行うことが挙げられます。しかし、自分が発見したストーリーはすでに株に盛り込まれているという事実のほうは見落としがちで、結局割高な株を買ってしまいます。

山口揚平『日本人が知らなかった新しい株の本』

---

1) 藤井由美(1992)「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学5』, p.32.

(15)「…まず第一に、おれが中村彌六を頼み、逸仙(孫文)さんに引き合わせた。その後、おれは中村彌六を信用し、すべてを任せてしまった。これがおれの失策よ」寅蔵は大きな杯で酒を呷った。

芝豪『擾乱1900』

(16)「おっ母さん…」神通力があるはずのお上人なのだが、まるで少年のように声を出してしまった。それから柄にもなく少し啜り泣いた。

立松和平『木喰』

(17)　毎年、外国旅行をしようと、せっせと旅行社をめぐって情報を集めながら、行き先を決めかねて延ばし延ばししているうちに、病気になってしまい、どこにも行かれなくなった。

加賀乙彦『夕映えの人』

(18)…彼女が看護婦になって家を出てしまうと、コーンウォール・リー家は絶えてしまう。名門を絶やすことはどう考えても惜しい。

豊田穣『あふれる愛』

(19)だけど、三角の部屋、五角の部屋ってのは、…中にすわっているときは、とくに不自由ってこともないけどサ、ところどころに妙な形のすきまができてしまう。それがやっぱり困るんじゃない？

阿刀田高『恐怖同盟』

(20)「一人の持ってた火が、風で飛んで、ガソリンに火がついてしまった。一人が火に包まれて叫び声を上げた…」

赤川次郎『その女の名は魔女』

これらの用例を観察してみると、(14)～(16)のように主体の意志的行為の場合も見られるが、(17)～(20)のように主体の無意志的状況で実現したことを表す場合が大部分を占めている。これは、通常、当該行為や作用が、話し手のコント

ロールの範囲に及ばない、他者の意志による行為や自然発生的現象として実現するときに、話し手が自分にとっては好ましくないと否定的に捉える傾向が高いということを反映していると考えられる。ただ、これはあくまで傾向に過ぎず、このような状況であれば必ず「-てしまう」は<遺憾>の意味を表すというわけではない。

以上、「-てしまう」の主観的意味<一掃><遺憾>の用例を、語形やそれを取り巻く文脈に着目してより詳細に見てきた。ただ、ここで述べておかなければならないことは、これらの主観的意味は決して排他的なものではなく、文脈によっては一形式に複数の意味解釈が可能となる場合もあるということである。次の例を見られたい。

(21) 高かったから迷ったけど、結局思い切ってマンション買ってしまったよ。
cf.高かったから迷ったけど、結局思い切ってマンション買っちゃったよ。

例えば、(21)のような場合、高い買い物をしたという負担を感じつつも(<遺憾>)、思い切って買うという決断を下した爽快さも入り混じっている(<一掃>)といえる。これは、<一掃>や<遺憾>といった意味が「−てしまう」形式に固定化した意味というよりは、文脈によって決定される語用論的意味の段階であるためだと思われる。

一方、「-てしまう」には以上のような感情・評価的意味が希薄化し、動作主体のコントロール不可能な状況下で行為が行われるということを表すものがある。次の例を見られたい。

(22) 道端に咲く美しい花を見ると、思わず立ち止まってしまう。
(23) 自身の偽装献金問題に関する質問に及ぶと、首相は思わず口をつぐんでしまった。

(22)と(23)はともに当該行為が動作主体のコントロール不可能な状況下で行われたことを表している。(22)の場合は、花の美しさが要因となって、「立ち止

まる」という行為が主体のコントロール不可能な状況下で実現、つまり主体が意図せずに行うということを表しており、(23)の場合は、偽装献金に関する質問が要因となって、「(口を)つぐむ」という行為が主体(首相)のコントロール不可能な状況下で行われるということを表している。

ただ、これらの用例は主体のコントロール不可能な状況下ではあるものの、主体の意志によって行われる行為であるということは完全には否定されないが、その意志性はきわめて希薄であるといえる。つまり、ここで問題となっていることは、当該行為が動作主体の意志で行われるか否かということではなく、話し手が、動作主体(話し手とは限らない)による当該行為を、主体のコントロール不可能な状況下で行われていると捉えるのかどうかということである。

では、次にこれらの<非意図>とでもいうべき意味を表す「-てしまう」を、さらに詳しく観察していく。

(24) スワンボートがあると、つい写真を撮ってしまう。今、もっとも熱い被写体のひとつ(知らんけど)。

宮田珠己『晴れた日は巨大仏を見に』

(25)　好きな人への手紙は、構えや飾りをいつの間にか忘れて、夢中になってかいてしまう。

小池邦夫『明日はいい日にしようしよう』

(26)　達郎は装置のすぐ横で椅子に座って待機していた。テーブルの向こうに野村の後頭部があった。手を伸ばせば届く距離だ。つい見入ってしまう。

奥田英朗『空中ブランコ』

(27)　芸能文化人の話が出たついでだが、今の日本のテレビに出てくるのべつまくなしの笑い顔の洪水というのはいったい何なのだろう、と時おり考えてしまう。

椎名誠『おろかな日々』

(24)の場合は、「(写真を)撮る」という行為が被写体であるスワンボートに誘発されて、無意識のうちに行われるということを表しており、(25)の場合は「(手紙を)かく」という行為を「夢中に」、つまり主体自らの意志のほかに、何らかの要因(例えば好きな人への強い思いなど)によって制御不可能な状況下で行うということを表している。また(26)の場合は、「(後頭部を)見入る」という行為が主体の好奇心などが起因して、主体の制御不可能な状況下で行われるということを表しており、(27)の場合は「考える」という行為が主体の意志とは無関係に自然発生的に行われることを表している。これらは話し手が、動作主体による当該行為を、主体のコントロール不可能な状況下で行われている、と捉えている点で共通している。

以上、「−てしまう」の<非意図>について見てきた。これらに共通する性質として「主体のコントロール不可能性」が挙げられ、そのような点で<遺憾>の意味との関連性が考えられるが、両者相互の関連性については次の機会に改めて論じることとする。ただ、この「−てしまう」の「主体のコントロール不可能性」という性質による当該行為の「非意図化」は、次に述べる「−てしまう」の間主観的意味<言い訳><照れ隠し><配慮>に作用していると考えられる。

2.3.「−てしまう」の間主観的意味

「−てしまう」が対話に現れるとき、話し手の聞き手に対する<言い訳>や<照れ隠し>、<配慮>を表す場合がある。次の例を見られたい。

(28) A:「誰?パソコンの電源、勝手に切ったのは」
B:「すみません…、私がさっき{切りました/切ってしまいました}」

(29)「今年は絶対無理だと思っていた司法試験。なんと今回、{受かりました/受かってしまいました}」

(30)「事故、{起こしたの/起こしてしまったの}?」

(28)のBは、パソコンの電源を断りもなく切ったことに対する謝罪の発話である。このとき、無標の形式である『切りました』の場合は主体＝話し手の意図性がそのまま感じられるため、主体＝話し手が意図的に『(電源を)切る』という行為を行ったという意味合いになり、その行為に対する話し手の反省の念が伝わりづらいといえる。しかし、有標の形式である『切ってしまいました』の場合だと、『-てしまう』の付加によって当該行為の『非意図化』がなされるため、主体＝話し手の意図性が軽減し、その行為が主体の意図するところではなかったという意味合いが聞き手に伝わる。よって、無標形式よりも話し手の反省の念が現れやすくなるということである。このとき注意しなければならないことは、『-てしまう』によって当該行為が『非意図化』され、主体＝話し手の意図性が軽減するとしても、それはあくまで『-てしまう』の伝達機能上の問題であり、当該行為自体が完全に『非意図化』されるとは限らないということである。つまり、その行為が行われる時点ではそれが誰かにとって好ましくない行為だとは話し手も認識していないため、行為自体は主体＝話し手が意図的に行った行為である。しかし、それを振り返って弁解する際に、話し手が『-てしまう』を付加して行為の意図性を軽減させることにより、意図的にその行為を行ったという印象を弱め、その行為に対する反省の念を聞き手に伝えるのである。

(29)の場合も『-てしまう』の『非意図化』が作用している。『受かる』は無意志動詞であるのでそもそも主体の意図性はきわめて希薄であるが、試験に受かるためには多少なりとも主体による働きかけ(勉強をして受かるための努力をするなど)があるということは否定しきれない。つまり、この場合は、明示されない主体の意図性(この場合は主体の働きかけ性といった方が適切かもしれない)を、『-てしまう』によってさらに軽減することにより、たとえそれが主体＝話し手の働きかけによって実現した事態であると話し手が認識していようと、それが主体＝話し手の働きかけによるところではないという意味合いを敢えて聞き手に伝え、話し手自身にとって好ましい事態が実現したということを控えめに伝達するのである。

(30)の場合は主体が話し手ではなく聞き手であるが、『-てしまう』の持つ『非意図化』が関連していることには変わりない。この場合、『(事故を)起こす』という行為は主体＝聞き手による行為であり、話し手による発話はその事態の真偽

を問うものであるといえるが、無標の形式である『起こしたの？』の場合だと主体＝聞き手の意図性がそのまま感じられるため、主体＝聞き手がその行為を意図的に行ったという意味合いになり、『(事故を)起こす』 という事態が実現したことに対して話し手が主体である聞き手を問い質すような、あるいは攻め立てるような印象を聞き手に与えかねない。しかし、有標の形式である『起こしてしまったの？』の場合だと、「−てしまう」の付加によって当該行為が「非意図化」されるため、主体＝聞き手の行為に対する意図性が軽減し、その行為が主体＝聞き手の意図するところではなかったという意味合いを聞き手に伝えることができる。つまり、その事態が主体＝聞き手の意図的な行為ではなかった、聞き手以外の何か他の要因も大きく関わってどうしようもなく実現したのだという意味合いを表示することにより、主体である聞き手に対する配慮が生じるということである。要するに、「−てしまう」の付加によって主体の意図性が軽減され、表現が直接的なものから間接的なものへと変わるということである。

ここで、今一度「−てしまう」の「非意図化」による意図性の軽減について述べておく。結論を先取りしていえば、主体の意図性を軽減するということは、つまり主体の後景化を意味しており、主体＝聞き手を後景化させて主体の関与性が希薄化したより間接的な表現をすることによって、聞き手への配慮の意味を生じさせるのである。このような主体の後景化については、本稿での表現とは多少異なるものの、すでに敬語構文に関する先行研究において言及されている。例えば、Ivana・酒井(2003)では、敬語文に現れる「なる」と「する」は軽動詞「なる」・「する」であるとし、“一般に軽動詞「する」は動作的・意図的・起因的事態を表現するために使用され、「なる」 は変化的、無意志的、自然発生的事態を表現するために使用される”と記述しており、益岡(2007)では、このような「なる」の事態が自然発生するという「自発性」の意味と「する」の主体が事態を引き起こすという「誘発性」の意味の対立に着目して、事態の中の人物に対する敬意を述語部分で表す敬語構文(益岡(2007)では「Ⅰ類の敬語構文」と呼んでいる)を次のように分析している。

Ⅰ類の敬語構文は、事態のなかの人物に対する敬意を述語部分で表す点は共通する。そして、敬意の対象が事態の主体か動作の受け手かという点は異なるが、有標の述語形式を用いて当該の人物を背景化するという点も共通する。具体的には、ナル型は自発性を表す述語形式を用いて動作主の意志性を背景化し、スル型は誘発性を表す述語形式を用いて動作の受け手の被影響性を背景化する。無標の述語形式が直接的な表現であるのに対し、当該の人物の意志性・被影響性を背景化するこのような有標の述語形式は、一種の間接表現と言ってよい。[2)]

また、川村(2004)においては「ラレル」形述語の尊敬用法の由来に関する従来の了解について次のように記述している。

尊敬用法の由来については、今日では自発用法からの拡張であると考える説が有力である。すなわち、尊敬の対象となる人物の行為をあたかも自然に起きたかのように表現することが尊敬表現につながるのだ、というものである。自発的な表現が敬語表現形成のひとつの道筋であるということは、例えば現代語の尊敬語に「お～になる」という言い方があることなどから、経験的・直感的に理解できる。ただ、人の行為を自然に起きたかのように語ることがなぜ尊敬表現として機能するのかについては、論者によって見解がさまざまであり、明確な共通了解があるわけではない。[3)]

以上のような敬語構文に関する先行研究の記述をみると、尊敬表現が 「自発性」の表現による敬意の対象の後景化(背景化)と関連しているということがわかる。つまり、事態が自然発生的に起きたかのように表現することによって敬意の対象の意志性や被影響性が後景化すると、それがより間接的な表現となって対象への敬意が生じるということである。そして、この現象は「-てしまう」 が表す<配慮>の意味の考察にも応用することができる。それは「-てしまう」にも主体の意図性を軽減するという、主体をある程度後景化させる機能があるからである。「-てしまう」は先のようなナル型の敬語構文や「ラレル」形述語の尊敬用法などの尊

2) 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』,くろしお出版, p.65-66.
3) 川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬－動詞ラレル形の世界－」尾上圭介編『朝倉日本語講座6　文法Ⅱ』, 朝倉書店, p.119.

敬表現ほど主体を後景化するわけではないので、尊敬を表すことにはならないが、主体の意図性を軽減して主体をある程度後景化するため、より表現が間接的なものとなり、(30)のように主体である聞き手への配慮の意味が生じ得るということである。ちなみに、(28)(29)のような話し手の聞き手に対する<言い訳>や<照れ隠し>の意味を表すものは、主体＝話し手の意図性を軽減して主体＝話し手を後景化することにより生じる意味であるといえる。つまり、(28)の<言い訳>の場合は、主体＝話し手の意図性を軽減してそれを後景化し、事態の発生の要因として主体＝話し手以外に目を向けさせることによって<言い訳>の意味が生じ、また(29)の<照れ隠し>の場合は、主体＝話し手の意図性を軽減してそれを後景化し、事態の発生要因が話し手以外にあるという印象を与えることによって<照れ隠し>の意味を生じさせるということである。

前述の通り、ここで述べている「非意図性」は、実際に動作主体が当該行為を「非意図的に」行なったということを表わしているのではなく、あくまで発話・伝達上のある種の効果として働くものである。したがって、たとえ動作主体が当該行為を意図的に行なっていたとしても、示し得る性質である。

文法化において意味が変化する際、事象や状況の現実世界としての特徴に関わる意味から、話し手の信念や態度を表す「主観的な」意味へと変化することを「主観化(subjectification)」であると述べたが、以上見てきた「−てしまう」の<言い訳><照れ隠し><配慮>の意味においては、さらに話し手の聞き手に対する認識的・社会的注意(配慮)を表す意味へと変化するという「間主観化(intersub−jectification)」が起こっていると考えられる。これは、「−てしまう」の「非意図化」に基づく<言い訳><照れ隠し><配慮>という意味が、話し手の事態(命題)に対する聞き手への発話・伝達態度を表していると考えられるからである。したがって、本稿ではこれら<言い訳><照れ隠し><配慮>の意味を、「−てしまう」の間主観的意味として提示する。

2.4.「−てしまう」の音韻縮約形「−ちゃう」

「−ちゃう」は「−てしまう」が頻繁な使用の中で音韻縮約(phonological reduction)[4]を起こした形式である。その意味は、これまでの用例を「−ちゃう」に交替させても同様の意味を表せることから、意味面においては「−てしまう」とほとんど変わるところはないといえる。ただ、「−てしまう」と「−ちゃう」は運用面において異なりを見せ、「−てしまう」がより改まった公的な場面で用いられやすいのに対し、「−ちゃう」はより日常的で私的な場面において用いられやすいということがいえる。

(31) 太郎がカードを配っちゃうと、皆は一斉にそれを手に取った。
(32) あまりにも汚いので、ベッドを片づけちゃいました。
(33) ベッド(を)片づけてちゃったの？
(34) 高かったから迷ったけど、結局思い切ってマンション買っちゃったよ。
(35) 道端に咲く美しい花を見ると、思わず立ち止まっちゃう。
(36) A：「誰？パソコンの電源、勝手に切ったのは」
　　B：「すみません…、私がさっき切っちゃいました」
(37)「今年は絶対無理だと思っていた司法試験。なんと今回、受かっちゃいました」
(38)「事故、起こしちゃったの？」

先に述べた通り、これらの例が全て可能であることから「−てしまう」と「−ちゃう」は意味面において大きな差はないが、運用面においてはそれが公的な場面で用いられやすいかあるいは私的な場面で用いられやすいかという点で異なるといえる。ただし、「−てしまう」と「−ちゃう」の運用上の異なりはその用いられる場面の公私だけではない。例えば次のような例においては、bの「−てしまう」より

4)) Hopper and Traugott(1993(日本語版2003))では、音韻縮約（phonological reduction）は子音や母音が落ちたり、アクセントがなくなって新しく形成された語へのアクセントの再調整が起こったり、隣同士の音韻が互いに同化しあったりすることをいい、助動詞によく起こる変化であると指摘されている。

もaの「−ちゃう」の方が自然である。

(47)(テーブルの上にあったボールペンが落ちるところを見て)

「a.あ、落ちちゃった/ #b. あ、落ちてしまった」

(48)(電車の発車ベルが鳴るのを聞いて)

「a.早くしないと電車が行っちゃうよ!/ b.電車が行ってしまうよ!」

(47)の場合は、(47b)だとボールペンが落ちた後の状態を描写して発話しているといえ、(47a)のようにボールペンが落ちるまさにその瞬間を捉える表現には不向きであるといえる。また、(48)は早く乗り込まないと電車に乗り遅れるという切迫した状況での発話であるが、このような場合は(48a)の方が(48b)よりも切迫した状況下の発話としてより自然であり、(48b)だと幾分かその状況を悠長に捉えているとさえ感じられる。

このように、「−ちゃう」は「−てしまう」よりも瞬間的・突発的動きを捉えるときや切迫した状況下のときに用いられやすいということがわかる。これは、「−ちゃう」が音韻縮約した形式として「−てしまう」よりも発音上の負担が減少したため、急速な発話を迫られるような状況のときには「−てしまう」よりも「−ちゃう」の方が話し手にとって発音上都合がよく、かつ聞き手に対するわかりやすい発話を実現することができるということである。Hopper and Traugott(1993(日本語版2003))では、“「信号の簡素化(signal simplicity)」をもたらすような速い会話において、会話の信号を少なくしようとする傾向があると考えるのがならわしであった。be going toがbe gonnaになるのはその一例に過ぎない”と述べている。

以上、「−ちゃう」が意味上は「−てしまう」とはそれほど異ならないものの、運用上においては差が見られるということを述べてきた。先に述べたように、「−ちゃう」は「−てしまう」が音韻縮約した形式であり、これは英語の「be going to」が慣用化、一般化を経て「gonna」と音韻縮約したように、「−てしまう」の使用頻度が次第に高まって慣用化、一般化した結果、音韻縮約を起こして生じた形式であるといえる。Hopper and Traugott(1993(日本語版2003))では、形態素化に付随して起こる音韻変化に関して、“語彙項目と接語が語幹、接辞として融合し

形態素化するとき、さまざまな音韻変化が起こる。それらは、音韻減少(reduction)である場合が多い”と述べているが、「-てしまう」が音韻変化の結果、音韻縮約して「-ちゃう」になるということは、つまり「-てしまう」において形態素間の境界線が比較的明確であった段階から、音韻縮約によってより境界線が曖昧になり、一つの形態素、つまり接辞のようなものに変化したと解釈することもできる。ただ、「-ちゃう」は活用して用いられるため純粋な接辞とはいえないが、一つの形態素と化しているという点を考慮すると「-てしまう」が限りなく接辞に近づいた形式であり、「-てしまう」における文法化の一つの証拠であるといえる。

Ⅲ. おわりに

以上、文法化の観点から日本語の補助動 詞「-てしまう」の意味変化に伴う主観化、間主観化の様相を考察した。

従来の研究において一様に指摘されてきた「-てしまう」のアスペクト的意味については、「-てしまう」の<完了>のようなアスペクト的意味は本質的なものではなく、それが頻繁に置かれる文脈がもたらす二次的な解釈に過ぎないということを明らかにした。「-てしまう」の主観的意味については<一掃><遺憾>を挙げたが、これらは発話状況を含めた文脈によってその都度実現する語用論的意味であることを主張した。また、間主観化による「-てしまう」の間主観的意味<言い訳><照れ隠し><配慮>については、「-てしまう」のもつ「非意図化」という機能が関連しているということを主張した。

最後に、「-てしまう」の音韻縮約形である「-ちゃう」が「-てしまう」とは意味面では大きな差はないものの、運用面で異なる特徴を見せるということ、音韻縮約によって一形態素化した「-ちゃう」は「-てしまう」の文法化における形態的な証拠であることを主張した。

今後の展開としては、通時的な観点から「-てしまう」の文法化の様相を考察し、以上のような「-てしまう」の意味拡張の動機づけがどのようなものかを明らかにしていく。その上で、「-てしまう」との類似性を示す韓国語の「-버리다

(-beolida[5])」「-고 말다(-go malda)」との比較対照を行っていく。

참고문헌

一色舞子(2007)「日本語の補助動詞「てしまう」−韓国語の補助動詞「아/어 버리다(a/e berida)」との対照を視野に入れて−」『北海道大学大学院文学研究科主催国際ワークショップ「東アジアの日本語研究」』, pp.79-84.

_____(2010)「文法化の観点からみる日本語と韓国語の補助動詞—「てしまう」と「-어 버리다 (-eo beolida)」・「-고 말다 (-go malda)」を中心に—」北海道大学大学院文学研究科修士学位論文.

Ivana, A・酒井弘(2003)「敬語文の構造と軽動詞」『日本言語学会第127回大会予稿集』

大場美穂子(1999)「日本語の補助動詞「しまう」の意味と用法」『日本言語学会第118回大会予稿集』.

尾上圭介編(2004)『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』, 朝倉書店.

奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって -金田一的段階-」『国語国文』 1巻.

_____ (1978)「アスペクトの研究をめぐって(上),(下)」『教育国語』53-54号.

川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬−動詞ラレル形の世界−」 尾上圭介編 『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』, 朝倉書店, pp.105-127.

金水・工藤・沼田(2000)『時・否定と取り立て[日本語の文法2]』岩波書店.

金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15巻

_____ (1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」 金田一春彦編 『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房, pp.27-61.

工藤真由美(1995)『テンス・アスペクト体系とテクスト—現代日本語の時間と表現—』, ひつじ書房

杉本武(1991)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要』, 人文・社会学編4, 九州工業大学, pp.109-126.

_____ (1992)「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学部紀要』, 人文・社会学編5, 九州工業大学, pp.61-73.

高橋太郎(2003)『動詞九章』, ひつじ書房.

鄭世桓・上原聡(2008)「日本語の補助動詞「テシマウ」に対応する韓国語のa pelitaとko maltaについて−文法化の観点からの対照分析−」『日本認知言語学会論文集』, 日本認知言語学会, pp.461-471.

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版.

5) ローマ字転写は、文化観光部告示2000-8号 (2000.7.7.) に基づく。

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法3』, くろしお出版.
藤井由美(1992)「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学５』, むぎ書房, pp.17-40.
堀江薫(2005)「日本語と韓国語の文法化の対照－言語類型論の観点から－」『日本語の研究』第1巻3号, pp.93-106.
_____(2008)「間主観化－文法の語用論的基盤のタイポロジーに向けて」『月刊言語』2月号, pp.36-41.
堀江薫・金延珉(2008)「「主観化・間主観化」の観点から見た日本語・韓国語の文法現象―Elizabeth C.Traugott教授の文法化研究の新展開―」『月刊言語』5月号, pp.84-89.
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』,くろしお出版.
_____(2007)『日本語モダリティ探求』,くろしお出版.
松下大三郎(1924)『標準日本文法』, 紀元社.
_____(1974)『改撰標準日本語文法』, 勉誠社.
三上章(1972)『現代語法序説』,くろしお出版.
吉川武時(1971)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房, pp.155-327.
P.J.ホッパー・E.C.トラウゴット　日野資成訳(2003)『文法化』, 九州大学出版会.
バーナード・コムリー　山田小枝訳(1988)『アスペクト』, むぎ書房.
藤井由美(1992)「「してしまう」の意味」言語学研究会編『ことばの科学５』, p.32.
益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』,くろしお出版, pp.65-66.
川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬－動詞ラレル形の世界－」尾上圭介編『朝倉日本語講座6　文法Ⅱ』, 朝倉書店, p.119.
Jakobson, R. 1957. Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb. Russian Language Project. Department of Slavic Languages and Literature. Harvard University.
Ono Tsuyoshi. 1992. “The grammaticalization of the Japanese verbs okuandshimau.” CognitiveLinguistics3.4:367-390
Strauss, Susan and Sung-Ock Sohn. 1998. “Grammaticalization, Aspect, and Emotion: The case of -tesimauandKorean-a/epelita”Japanese/Korean Linguistics8 .CSLI,217-230.
Traugott, Elizabeth C. 1995. “Subjectification in Grammaticalization.” In: Stein, Dieter and Susan Wright (eds.), Subjectivity and Subjectivizationin Language.Cambridge University Press, 31-54.

Traugott, Elizabeth C. 1999.“The role of pragmatic change ”.Pragmaticsin 1998:Selected Papersfromthe 6th International Pragmatics Conference. Vol.2,93-102. Antwerp: International Pragmatics Association.

Traugott, Elizabeth C. 2003. “From Subjectification to Intersubjectification.” In: Hickey, Raymond(ed.), MotivesforLanguageChange.Cambridge University Press, 124-139.

Traugott, Elizabeth C. and Dasher, Richard B. 2002. Regularityin Semantic Change. Cambridge University Press.

❖ 투고일 : 2010. 12. 31.
❖ 심사일 : 2011. 01. 31.
❖ 심사완료일 : 2011. 02. 10.